

## 越前市中心市街地活性化基本計画について

“越前国府 1300 年の歴史と文化が香るやすらぎのまち”を目指して

三田村 忠邦 越前市建設部都市計画課新庁舎建設準備・中心市街地活性化推進室

## 越前市の概要

本市は、福井県のほぼ中央に位置し、面積は 230.75 km<sup>2</sup> で県面積の約 5.5% を、人口は 87,742 人 (平成 17 年国勢調査) で県人口の約 10.7% を占める。

本市の歴史は古く、継体大王 (507 年第 26 代天皇に即位) 伝承に見られるように、越の国と呼ばれた頃から拓けた地域で、旧武生市には越前国府が置かれ政治・経済・文化の中心地として栄えた。平安時代には、「源氏物語」の作者、紫式部が越前国司として赴任した父とともに多感な青春時代の一年余りを暮らした地である。また、旧今立町は、和歌集や写経の用紙に用いられた越前和紙の里として知られ、明治の初期の頃まで奉書紙や奉書紬の産地として和紙や繊維を扱う商店が集まり大変栄えたまちである。現在も、旧両市町のまちなかの辻や地名、行

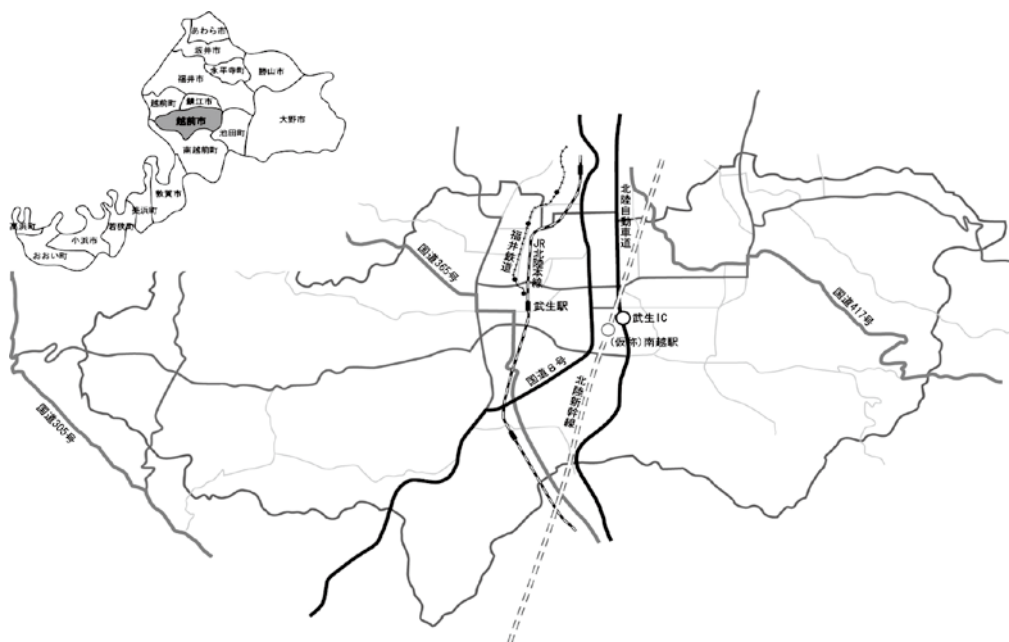
事などにその歴史と伝統の重みを感じることができる。

1,500 年の伝統を誇る越前和紙、刃物業界で初めて国の伝統工芸の指定を受けた越前打刃物に代表されるように、本市は古くからモノづくりが盛んな地域であり、固有の地域文化が培われている。

近年は電子部品や輸送機械等のハイテク企業が立地し、地域産業に広がりが増し、県下第一位の製造品出荷額 (県内シェア 22%) を誇る産業都市として発展を続けている。

また、商業・サービス業も丹南地域の中心として古くから栄え、こうした活発な産業を背景として、人口は長年にわたり緩やかに増加してきた。

市域は、明治 22 年に市町村制が施行された当時は 1 町 16 村で構成されていたが、昭和 23～34 年の市町村合併により武生市と今立町となり、平成 17 年 10 月 1 日には両市町が合併し「越前市」が誕生した。





## 1,300 年前から中心市街地

中心市街地は、JR 北陸本線武生駅から約 1 km の区域（面積 123 ha）を設定している。江戸時代までは府中と呼ばれ 1300 年も続いている“まち”で、総社や国分寺をはじめこれほど多数の寺社が集積しているのは全国でも珍しいといわれている。しかし、当市街地も自動車社会の進展とともに空洞化が進み、商業地・住宅地とも深刻な状況である。これまで旧法に基づく中心市街地活性化計画では、駅南再開発、駅北区画整理（大規模小売店、共同駐車場、街路整備）、街なみ環境整備、商業活性化、福祉健康センター設置等の各種事業に取り組んできたが、空洞化に歯止めがかからず、人口（6,320 人。過去 15 年間で 30% 減少、高齢化率 34%）、商店・事業所、歩行者数は激減している。



面積 123 ha

## 中心市街地活性化基本計画の目標

武生は、越前国府がおかれてから 1,300 年間“まち”であり続けたことが最大の特徴であり、寺社、町家、蔵、路地等が数多く残り、越前の歴史を代表する“まち”である。また、公共交通機関、商業施設、都市福祉施設などの都市機能が丹南地域で最も集積していることから市民の活動の拠点、大都市との交流の玄関口、県下トップの工業出荷額を誇る産業都市の“顔”となっている。

こうした中心市街地が「誰もが住みやすく、人が訪れ、集い、にぎわう」場であることが、本市総合計画の重点目標に掲げる「定住化の促進」、戦略的取組みに掲げる「都市のブランド力を高める戦略的なまちづくり」や「知性と創造力に富んだ北陸一の産業・技術都市づくり」、「成熟社会にふさわしい定住都市づくり」を実現するために必要である。

このため、向こう 5 年間は活性化に向けて足元を固める時期と捉え、まずは定住人口及び交流人口を増やす取組みを優先する。交流人口を増やすためには、集客力のある商業・娯楽施設の立地が望まれるが、まちを歩く人が少なく商業環境が悪い現状では難しく、まずは (1) まちなか観光、(2) 文化活動・市民活動・イベント等の市民事業を促進し、市民や市外の人がまちを訪れる機会を創出しながら歩く人を増やし、商業環境の向上を図る。

## 【5年後の目標】

～長期的な空洞化に歯止め、活性化に向けた足固め～

### 目標① 住みよく、多様な住まいができる中心市街地

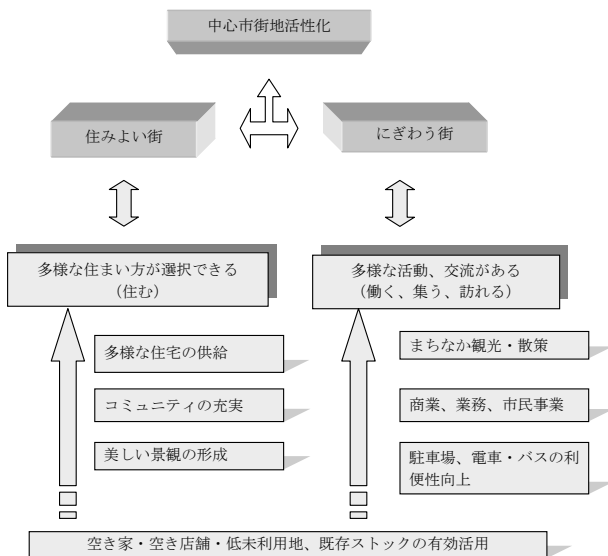
■人口 2%増加（平成19年）6,320人⇒（平成25年）6,450人…H18年レベル

（中心市街地の人口は過去15年間で30%減少しており（1年間に2%の減少）活性化策を講じない場合、H25の人口は5,765人と推計される。よって、実質的には12%の増加となる目標の設定をしている。）

### 目標② 多様な主体の活動と交流による“にぎわう”中心市街地

■休日の歩行者数 30%増加  
（平成19年）994人⇒（平成24年）1,300人

■空き家数（参考）減少  
（平成18年）221件⇒（平成24年）減少

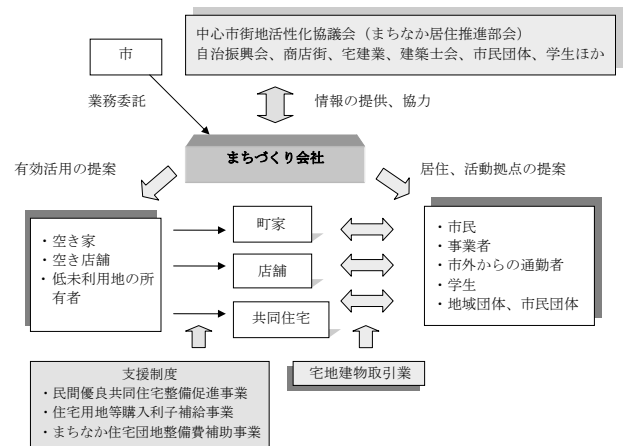


## 【目標達成のための主な取組み】

### 1・まちなか居住の取組み

#### ■ 定住化の促進

- ・まちづくり会社を中心となり、地域住民、建築士、宅地建物取引業者等の協力得て、土地所有者等に対して有効活用策を提案していく。あわせて、市外からの通勤者や学生をはじめ、広く市民に“まちなか居住”の魅力情報を発信することにより、多様なライフステージに対応した住宅の供給及び居住を促進する。
- ・中心市街地において一戸建住宅、共同住宅、高齢者向け住宅等の整備を促進するため支援制度を創設し、多様な住まいが選択できる中心市街地を目指す。



## 2・まちなか観光、文化活動やイベント等の市民事業を促進する取組み

### ■ 伝統工芸品・観光PRセンターの開設

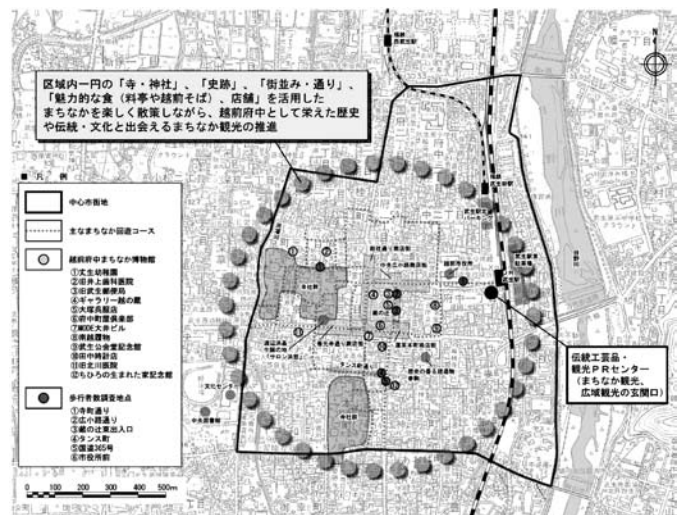
越前の伝統工芸品（打刃物、和紙、指物等）展示と総合観光案内を兼ねた「観光・匠の技案内所」を、JR武生駅前の再開発ビルに開設する。

JR利用者をはじめ観光客や市民に、伝統工芸品・産地での体験観光や、周辺観光地への玄関口として、また、まちなか観光の案内及び情報発信・収集の拠点とする。

### ■ まちなか観光ツアーの企画運営

寺社、まちなか博物館、商店、飲食店等の協力を得て、魅力的なコースを設定しPRする。

また、語り部の会の協力のもと越前の歴史、物語を紹介しながら散策する定期的ツアー、イベントや寺社の催事と連携したツアーを実施する。



■ 回遊コースのサイン整備、亘が辻・タンス町周辺の回遊コース整備

- ① 活性化区域一帯に散在する歴史資源等を結ぶ回遊コースを設定し、ルートサイン等を整備し、わかりやすく楽しく歩けるコースづくりに取り組む。
- ② “蔵の辻”や“寺町通り”をつなぐ散策ルートとして“亘が辻・タンス町周辺”を重点地区とし、住民による景観まちづくりの取り組みとあわせて道路景観等を整備する。

■ イベントと連携した“まちなか観光”の推進

中心市街地では、県外からも多数のファンが訪れる「たけふ菊人形」、「武生国際音楽祭」、「源氏物語アカデミー」、「丹南アートフェスティバル」等のさまざまな文化・交流活動が展開されている。こうしたイベントや寺社の行事等を活用・連携し“まちなか観光”を推進する。

■ 市民が“まち”を訪れ、楽しみ、交流する場の創出  
“蔵の辻 壺の市”を充実発展させ、市民をまちに呼び込む

“蔵の辻”は、町家の奥にある蔵を再生し飲食店等に活用した区域で、国土交通大臣表彰の「美しい街なみ景観大賞」を受賞し全国から視察がある。

“市民活動でイベントも開催され中心市街地の核となっているが、日常的に訪れる人は少ない。

平成19年4月から住民、商店、NPO等が実行委員会を立ち上げ、“蔵の辻”を舞台にして毎月第一日曜日に“壺の市”第三日曜日に“参の市”を開催している。オープンカフェとフリーマーケット、及び骨董を中心に運営され、1日に約800人が訪れている。今後、さまざまな市民・団体に参加を呼びかけ、ライブコンサート、映像、芸能、子供向けのイベント等と組み合わせたオープンカフェの開催回数を段階的に増やし、月4回の開催を目指す。



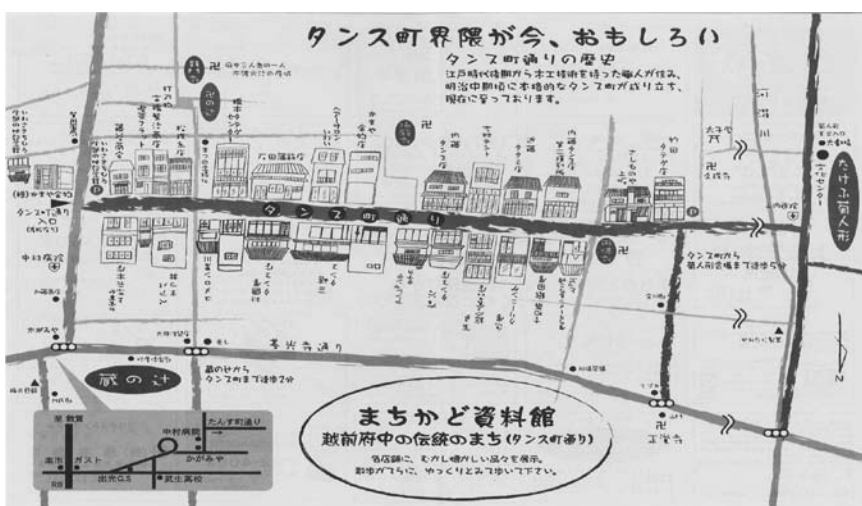
壺の市で賑わう蔵の辻

■ タンス町界隈の“おもてなしの店”、“匠の駅”の開設

タンス町界隈は、地場産業の家具・建具店が集積している通りで、住まい・商店・工房が連なった街並みを形成している。住人、商店、指物職人が「タンス町界隈まちづくり実行委員会」を結成し、“たけふ菊人形”の開催時期にあわせた“菊街道”、“屋台祭り”、“まちかど資料館”等に取り組んでいる。平成19年度からは県のアドバイザー事業を活用し、訪れた人が入りやすいように店のレイアウト改装にも実践している。

今後は次の事業に取り組み、訪れた人と住民との交流がある通りにする。

- ・“まちなか散策”する人が休憩でき物語が聞ける“おもてなしの店”づくり
- ・定期的なイベントの開催
- ・タンス町交流施設（仮称）匠の駅の開設





### ■ 武生公会堂記念館の文化力向上事業

武生公会堂記念館は昭和4年に建設され、旧武生町民の文化活動の中心施設や町役場として使用された武生のシンボリック建物である。現在は市の歴史・文化の紹介や考古・歴史・美術・民俗資料等の収集保存活動の拠点として利用されており、平成18年度の入場者数は7,673人である。

今後、歴史博物館機能の充実、子どもから高齢者まで楽しく参加できる「えちぜん学・集・楽」、特別展の開催等により市民が何度も訪れたい場にしていく。



公会堂記念館

## あとがき

人口減少、少子高齢社会の中で、財政的な自立、持続可能な社会の構築、豊かなコミュニティの形成をはかるため、計画的な土地利用により市街地の無秩序な拡散に歯止めをかける。そして、これまで整備を進めてきた都市機能を有効に利用しながら、地域特性を踏まえたコンパクトで暮らしやすいまちづくりを推進していくことは、社会情勢の変化を背景とした流れである。

中心市街地活性化は商店街の活性化という捉え方が今までの考えであった。しかし、本来、中心市街地には、居住機能、商業機能、業務機能等さまざまな機能が集積しており、一概に中心市街地活性化＝商店街の活性化にはならず、もっと多面的、重層的に取り組んでいくことが重要である。

また、中心市街地は長い歴史の中で文化、伝統をはぐくみ、各種機能を培ってきた「まちの顔」とも言うべき地域であるがゆえに、ハード面とソフト面両方から政策的に実行していく必要がある。今回の中心市街地活性化基本計画は、これからの時代背景を踏まえ、将来のまちづくりの方向性と具体的施策を住民の声を捉えながら策定したものであり、今後、さまざまな主体と連携しながら計画推進に取り組んでいく。

(みたむら ただくに)